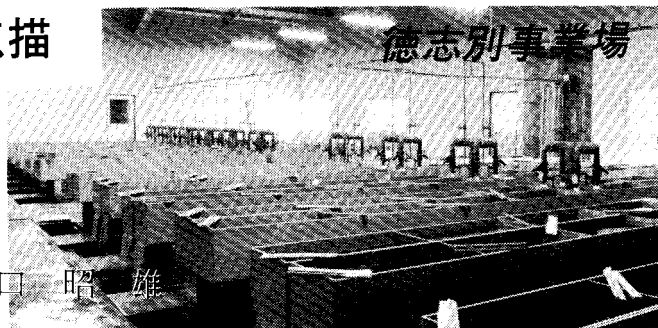


事業場点描



田 口 昭 雄

事業場点描の原稿を依頼され、いささかとまどいを感じ乍らも回り順番なら致し方なしと勇をふるって駄筆を走らせることとします。

何せ普段から手紙もろくに書かないため、あらたまって文章となると何から書き出し、何んで結末をつけようかと頭の中はさながら都会のラッシュアワーの如き状態ですので、多少辻つまのあわない面は、平に御容赦をお願い致しておきます。

さて当场を紹介するには所在地が枝幸町とは云いながら、町より可成離れた一部落なため、道順よりお話し致しましょう。先ず基点を興浜北線の終着駅である北見枝幸駅とします。そこより真直ぐ国道238号線に向い300m程行きますと道巾はそう広くありませんが、これから通る国道238号線に出ます。そこを右折し、左側に3月とは云え未だ海一杯に張りつめた氷の海、海明を心待ちにしている漁船、右側には雪をすっぽりかぶった歌登岳をながめながら途中、北見幌別川や岡島という小部落を通り南下すること約14km、日ざす徳志別部落に到着致します。当场は、この部落の南側にある、さけ・ます増殖河川徳志別川にかかる橋の手前より右折 500m程入った左側に、この地には不相応な感じのする大きな建物がそうです。

昔は、この部落も漁業に又農業にと開拓者も多く入り戸数も 100戸以上を数えたと云われていますが、今はその面影がなく、漁業と酪農を主に在は40戸余の小さな部落となっています。

当部落名の由来は、北海道の各町村同様アイヌ語よりきており「枝幸町史」によりますと、トクシウシベツ（あめますの多い川）ともトブウシベツ川（根曲竹の多い川）とも解されていますが、土地台帳より追うとトブウシとあるので開拓者達が根曲竹のため苦勞したことから、根曲竹の多い川が正しいとされています。従がって、トブウシが現在の徳志別に変ったも

ものと解されます。

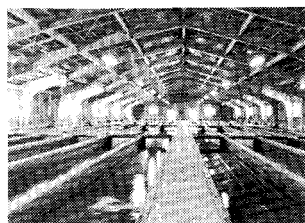
当場は、この根曲竹の多い川即ち徳志別川河口より上流約1kmの所にあり、徳志別にて再生産のため捕獲される、さけ、さくらます、からふとますの3魚種について、ふ化放流を行なっています。

この川での、ふ化事業は大正7年当時の枝幸漁業組合がアトキンス式ふ化槽2間槽6本を使用したのが最初で、その後昭和9年官営に移行するまで同組合の運営で行なわれていました。官営移行後は、道より国へ移行しましたが、事業は年々その実績を挙げ、北海道でも有数の増殖河川としてその目的を達成しつつありました。昭和36年同川の上流にある本庫鉦山より鉛及亜鉛、銅の選鉦廃水が支流オフタルマナイ川を経て徳志別川に流れこみ36年には約12,000尾、37年20,000尾のそ上親魚が斃死するというアクシデントに見舞われました。その後、鉦山保安局、北大、ふ化場3者による調査の結果重金属による鉦毒が原因と判明、同鉦業所に中和の薬液注入、沈殿池の増設を指示し実行の結果徐々にではありますが斃死も減少、40年にはほぼ斃死も見当らなくなりましたが、その後遺症は後々迄ひびき、特にさくらます、からふとますは未だ、もとの姿に迄で立ち帰ってはいません。しかしさけについては、移殖卵の受給もあってか現在では毎年約5,000尾前後の回帰もあり、海面においてもその水揚げは年々向上の一途をたどっています。

当場は52年度、53年度に亘り施設が一新され、今迄の場所とは反対の所に収容能力1920万粒のふ化室が出来ました。クリーム色の外壁、青緑色の屋根、長さ90mにもおよぶ施設は誠にすばらしいものです。旧施設もそのままにしてあり総収容数は約2300万粒となります。この施設を与えられた私達(田口事業場長、石村技官)は、幸せ者と思い益々オホーツク海北部海域の資源増成に意欲をふるいおこしている現在です。

今年の海明けは、暖冬異変のせいか早そうです。稚魚も身体一杯春の日差しをうけ、撒かれる餌に飛びつき、体力の調整に余念がありません。気は早、北の海をめざしているのでしょう。

施 設 の 能 力



収容能力	増収アトキンス式2間槽	48本	1920万粒
ふ化室	鉄骨造り長尺カラー鉄板葺		334.8 m ²
集水井	第一井戸	1 t/分 5.5kw	1 台
	第二井戸	2 t/分 5.5kw	3 台(1台予備)
	第三井戸	2 t/分 11.0kw	1 台
養魚池	土家…鉄骨造長尺カラー鉄板葺		
	池…鉄筋コンクリート造		1.224m ²
	長さ17m 巾1.8m	40面	
飼育池	鉄筋コンクリート		900 m ²
	長さ25m 巾4.5m 深さ1m	8面	
放流水路	コルゲートフリューム造		89.7m